

だが、僕は東京で、母の原型ともいふべき恐ろしい母体に出会ってしまったのである。桜井の顔は、彼の古色な布は、東洋の源泉にあるチベットの血の臭いがしており、魂次元から感じられるような「心的子宮」を意味する「クンダリーニ」とインド人がよぶ、あの地球を凝縮した生命再生と死滅的破壊とをカオスする「ろ過器」としての母性だった。

九州の桜井という布袋は、地球発生以来の太古からめんどめんどと秘伝され続けたであろう「反文明、非文化」的な得体のしれない不気味なものに織りこまれ染め上げられており、その彼女のポケットに入れられた僕の男根は、その細長くなった息子の素材は「生命と種子とを切り離された老婆のような藁」で出来ておったことが理解させられた。日本という女性器を象徴する「島国」に、少女のような植物として育ったはずの稲は、その母なる大地から成人式をしたために、今生命なき「藁」となり、その日本式の素材を西洋思想に同化しようと男根を外国にまで引きのひっぱり亀首をもたげた……骨も肉もない「薬細」としての僕の息子の虚体が、母の布袋のなかから、だらりと引きずり出されて、僕の目の前にぶら下がっていたではないか。

銀座の街角が死化粧の仮面をかぶりはじめたから、我がゼロ次元が全裸でその外皮面をはがしてやろうと強姦しているときに、九州からまた桜井の顔面のなかに、僕のペニスの中味の正体がいやというほど正確に描写され映されていたのを見て、そのときから僕は「桜井という原型母体」から送られたメッセンジャーを「鏡」として、常に全裸で「自己中味と他者仮面と」を映しながら生きることを「アート」（ゼロ次元）だと確信するにいたったわけである。

桜井が九州で掘り起こしたその母性の鉦脈に、切りはなされた細なわのリングムを再び結びあわせる秘術を求道するため、僕は自身の肉体内部の地界を井戸を掘るように垂直方向へと進みつづけるなら、あのチベット老女の顔にいつかは亀頭がつきささるだろうと思ひ、まだ東京より地盤の柔らかな故郷名古屋で久しぶりに儀式集会を計画したのであった。

母をふり切って東京に西洋流の父を求めてきまよった息子が、たしかに男でありながら太めの身体をアヒルのようなよなよさせながら「シェンシェイ、シェンシェイ（先生）」と自分より常にレベルの低い患者に笑いかけて、東洋の母性をおしげもなくふりまく「桜井孝身」と呼ばれたアイデンティティに通底するために全国の同志に「狂気見本市・日本超芸術儀式集会」をよびかける（1964年9月）

名古屋の東山の戦没者碑のある平和公園の山頂にまで、県美術館の会場から一時間あまり百名ぐらいのものたちが五個の「わらひもで作った電車を各人が手でささえ」てチンチ

ンゴーゴーとさけびながら徒步行進してゆき、男達を二十名ずつ2組に並列して全裸で寝かせて丘のうえに肉布団を作った。そのワニザメの並ぶ布団のなかで2人の美しい白ウサギの裸女が平泳ぎで何回も何回もくりかえし競争をやり、ひんむかれたまま動かなくなった白ウサギが休息しようとするると肉布団の男達がこんどは下から波のような激襲動をつきあげて「和製のナジャ」を、夜が明けるまで母なる地底が受け入れるまで、肉布団達は運送行為をやめようとしなかった。暗黒の地面にのたうち泳ぐ2組の肉布団のなかに、桜井も一匹のワニザメとして、わが「全裸ホイホイ行進団・ゼロ次元儀式派」との「アンダーグランド」の地縁を結ぶ、正統派としての証明を、やむなく彼も布団でK・O寸前に認めざるをえなかったのである。このとき集まったのは、後日にサイケデリック・アートやドロップ・アウト運動になだれこんで「インド」を地界の基地に指名してゆく「フラワーチルドレン（ヘッド・レボリューション）」の主役になるもの達が大半であったことに、まだだれも気付けないでいた。